

研究報告：意味を持つ空間内での作品展示：花山天文台内山本資料室での作品展示

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学美術学部 公開日: 2019-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 滝口, 洋子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0000000240

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.



研究報告：意味を持つ空間内での作品展示： 花山天文台内山本資料室での作品展示

Artwork in Space with Meaning:

Exhibition at the Yamamoto Material Room in Kwasan Observatory

Harufumi Tamazawa 玉澤 春史

2018年11月3日、京都大学の花山天文台における一般市民向けの公開において、資料室における作品展示が行われた。天文台や資料室といったすでに機能がある空間、および個々の資料のなかでの展示は、その空間に見合うような作品制作を作家に意識させ、作品だけでなく空間のもつ雰囲気の魅力も引き出す構成を作家に考えさせた。

1) はじめに

近年、地域や施設の活性化策の一つとして、様々な場所でアートイベントが行われている。美術館やアトリエなどの作品展示を目的とする場所ではなく、日常的な場所、あるいはほかの目的がある空間での展示は、空間的・時間的な制限のみならず、空間の持つ意味によっても別の制限がかけられる。一方で通常の展示とは違う場所での展示は、作品、あるいは作家にも影響を与えると考えられる。

アートイベントにおける空間と作品・作家、あるいは鑑賞者まで含めた考察の例として、上段・脇田(2010)をあげる。上段・脇田(2010)では大阪市中央区空堀地区で行われていた「からほりまちアート」を対象に、歴史的市街地のどの地域資源に注目があてられているか、展示場所の特性や利用方法に着目したうえで、作品形態との作用を考察している。都市などでのアートイベントでは、都市や町といった大枠の元、店舗や住居といった様々な場での展示が行われる。

一方で、展示会場として扱われる場所のなかには、特定の機能をもった場所というものも存在する。アトリエや美術館といった、まさに展示するという機能をもった場所以外の機能をもった場所に展示する場合、展示作品、あるいはその作者にも影響を与えることが推察される。

場所の持つ機能と作品・作家の相互作用を一般化して検討する以外にも、その前段階として個別の機能に着目して検討するのは有益であろう。

本稿では2018年に京都大学の花山天文台で行われた展示企画について扱い、天文台という機能に限定してどのような影響を作品・作家に与えるか考察する。

2) 花山天文台での展示企画の経緯と概要

本稿で扱う対象は、2018年11月3日、京都大学・花山天文台の特別公開にて実施された展示企画である。天文台での企画の経緯と、2018年実施分に関する概要を述べる。

2.1 花山天文台での作品展示企画の来歴

本稿での対象となる花山天文台での展示企画は、2013年より行われている。まずその経緯を記す。

京都大学理学研究科附属花山天文台(以下、単に「花山天文台」とする)は1929年に東山区の花山に設立された。設立当初は観測の最前線だったがその後附属天文台としては1968年に飛騨天文台、2018年に岡山天文台が開設され、花山天文台は教育および普及施設としての側面が強くなっている。

建築から85年以上たっていることもあり、花山天文台には研究施設として以外の価値が出ている。京都にこの近代建築の特徴ある例として、2013年に京都市の「京都を彩る建物や庭園」に選定、翌2014年には認定されている。また、観測装置・望遠鏡についても100年以上前に製造された屈折望遠鏡や現役に稼働するものとしては日本最古と思われる重力追尾式の望遠鏡などもあり、資料的価値をもっているものがある。

観測天文学研究の最前線としての場から教育の場とし

て転換し、さらにそれ以外の価値を持ち始めている花山天文台の活用方法について、様々な企画が模索されているが、2013年から天文台の一般公開（現在は特別公開と名称変更）の際に、天文台に展示することを前提にして作品を制作・展示してもらう企画がつづけられている。展示のテーマは年度によってさまざまである。例えば、2013年については、人工衛星取得データの芸術的利用という観点から募集を行った（玉澤他 2014）。2016年は外部キュレーターによる設営、2017年は天文台で保存する資料を芸術的観点からみる、といった内容で行われた。

2.2 2018年実施の作品展示企画

2018年の天文台展示企画も特別公開に合わせて行うことになり、京都大学の宇宙総合学研究ユニット（宇宙ユニット）が主体となった。展示企画のなかにはテーマに沿った作品を公募していたものもあるが、本稿の考察対象は協力展示として行われたもので、公募とは別に扱っている。

2.3 山本資料室

今回の作品展示の場所となったのは、花山天文台の本館にある資料保存のための部屋である。

保存されている資料は花山天文台の初代台長である山本一清が京都大学退官後に設立した私設天文台のものである。

山本天文台の老朽化に伴い、そこで集められていた資料が花山天文台に移管されることになり（富田 2012）、調査、修繕、目録作成等を行った後、花山天文台に保管されている。花山天文台には十分な閲覧スペースがないため山本天文台資料は通常公開はされていない。

山本天文台資料には膨大な書籍資料の他、当時の各国の望遠鏡の模型や古い実験器具、動物のはく製などの教具にあたるものもあり、理科教育史、天文教育史の観点からも貴重な資料となっている。2017年の展示企画では、山本天文台資料に焦点を当て、一部資料を保管していた本館2階の部屋にて展示した。その後、部屋を展示にも使いやすいような状態として「山本天文台資料室」として扱っている。

2018年の展示にあたり、京都市立芸術大学美術学部の2018年後期のテーマ演習（担当教員は磯部洋明准教授）に参加している学生の有志4名が展示企画への協力として展示に参加し、あらかじめ山本天文台資料室に展示することを前提としたうえで準備してもらった。

2018年11月3日に行われた花山天文台の特別公開にあわせて展示が行われた。



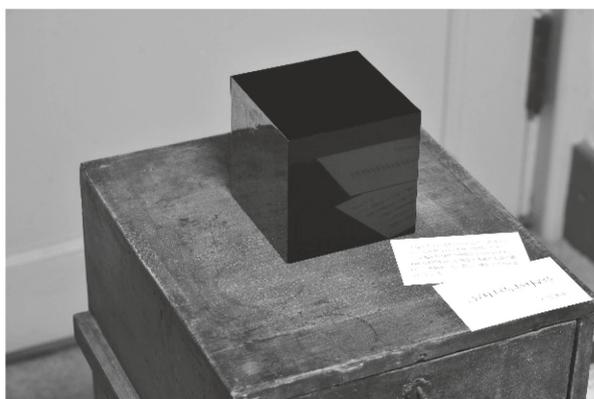
特別公開および展示企画当日の花山天文台本館。この建物の2階に展示場所として利用した山本天文台資料室がある。

3) 展示作品

以下に当日展示された策人の写真を記す。展示に際し、一部資料の配置は入れ替え、作品の展示台の一部として利用している。



展示会場となった資料室入り口から見た構図



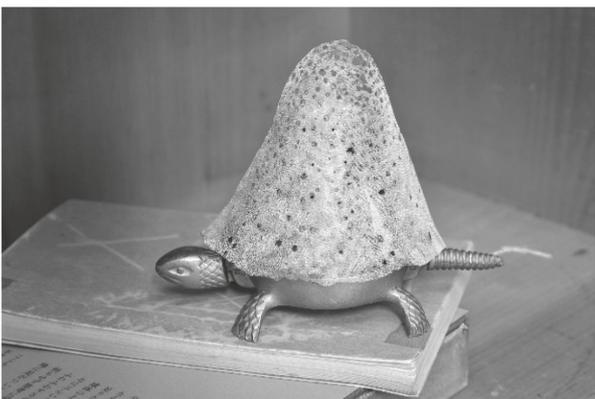
中田恵子「トキメキトキメキトキメキトキメキ」



大里真瑛子「無題」



佐藤由輝「OMIYAGE」



玉井静穂「空想」

4) 考察

作品出展者には設営・展示の前後で適宜聞き取りを行った。また、後日出展に関するアンケートに回答してもらった。内容は参加理由、展示場所としての資料室の

扱い、天文台の利用などについての自由筆記である。

展示会場となったのは、単純にアトリエや美術館など展示スペースとして普段使われていない場所、というわけではなく、天文台、資料室という他の目的をもった場所である。ここから作品制作・展示への意識が展示スペースである天文台・資料室であることからどう影響したかを伺う。

天文台での展示ということへの興味はどこにあるか。アンケートからうかがえるのは、通常の展示場所とは違ったところでの作品展示への興味である。

・単純に一度花山天文台を訪れた時にとても天文台の空気感が好きになったから。また、一般的なギャラリーの様なホワイトキューブではなく、既に場としての機能が十分に設定されている空間で展示する機会が減多に無いから。

展示スペースとなった資料室は、天文観測を行う望遠鏡が設置されているドームの真下にあり、もともとは研究室として使われていた部屋である。このため通常の四角い部屋ではなく、カーブを伴う構成であり、資料がなくてもホワイトキューブとはまったく異なる空間である。これについては

・珍しい円形の建物なので、もっと有効に活用できたらよかったなと終わってから思いました。

のように、より空間に考慮した展示もありうることを示唆している。展示の制約上、作品サイズを10cmに指定しているため大がかりな展示は今回対象外であったが、空間へのより積極的な介入も考えられうる。

2013年に実施した時、作家は事前の下見したうえで、展示希望箇所を選択して展示をした(玉澤他2014)。今回は事前の下見はあったが、主催者側から展示場所である資料室を指定されている。その場の雰囲気にあった、という前提条件は変わらないが、場所選択の自由度がより制限された状態での展示といえる。一方で部屋内の資料は適宜移動しており、2013年実施時には観測装置など移動が原理的にできない、あるいは通常観測につかっている場合は業務に差支えがない、という実質的な制限があった。

天文台の、さらに資料室といった場所を前提とした作品展示について、出展者の考慮した点は雰囲気の作品のバランスである。アンケートより抜粋する。

・もともとの部屋の雰囲気を壊さずにどうより良くするか(棚や机の配置がえ)と視点や導線の確保

・空間自体の雰囲気は年季の入った棚等によってほぼ完成されていたので、余計な物（新しい棚や真っ黒の布などの、強い or 生っぽい色を持つ物）を隠すことで場を完成させようとした。また、大きな机では無く小さな棚を一人一人の展示台にして単独に配置することで、大きな棚や机が並ぶ空間にアクセントとなり、小さい作品でもしっかりと目に付くように工夫した。

・展示させて頂いた山本資料室の雰囲気と作品とを調和させつつ、部屋に馴染み過ぎず、鑑賞者に作品と認識してもらえるように自分の見せたい置き方より鑑賞者の視線をより意識して考えました。また作品に対しての照明がないのでその部分での作品の表情の見せ方が難しかったです。

展示されている資料が年季を感じさせるものであり、また天文台自体も設立当初の姿を多く残した場所である。すでに成立している雰囲気を壊さずにどのように策人をマッチさせかつ認識してもらうかの配慮には、作品そのものだけでなく鑑賞者の視点まで考慮に入れる必要があった。単純に雰囲気にあわせる、といっただけでなく、

・魅力的なもの（作品以外の）がたくさんありすぎる。作品をもっと持っていけばよかったですと思いました。

というように、雰囲気に匹敵する作品をもってくる、という意識も（あとからではあるが）生まれている。藤井・佐藤（2009）では様々なアートイベントにおける展示空間と作品形態に関して分析を行い、企画・運営主体を細分化することにより傾向が得られるであろうことを示唆する。一方で企画側の意図とは別に、すでに場所がそのまま目的と一体介しているような場所は、より場所の支配力が強くなり、作品の傾向もかわってくることを示唆している。

天文台は町の光から逃れるために、中心部から距離を離れて設置される。花山天文台も現在では山科区の光が多いため夜間観測が難しくなっているが、開設当初は京都市内の光をさけるために京都市内からは若干離れた位置にあり、交通アクセスはややしにくい箇所にある。展示スペースとして天文台を捕えたときには利点と欠点の両面がある。アンケートより抜粋する。

・面白い場所だと思いますが、交通が不便なので、今回のように展示だけをやるのではなく内部の見学のように他に体験できるイベントも一緒に企画するのがいいと思います。

・交通の悪さや導線のややこしさはありますが、花山天文台の古き良き建物の魅力は制作側のモチベーションや感性をくすぐるところが多いと思うので展示場所としてよいと思います。

天文台という場所の特性上、アクセスのよい立地にはなりにくい。展示を見てもらう点ではこの点は明らかに不利である。今回のような一般向けの公開では、最寄り駅からのバスを出すなどするが、それを含めてもなお、気軽に見に行ける、という場所ではない。一方で、そのアクセスの悪さを含めた環境も天文台の構成要素であり、雰囲気の形成に一役買っているのは、過去の展示企画参加者からも同様に指摘されている。空間構成必要な要素であればアクセスのしにくさが必ずしも作品の展示にはマイナスになるだけではないことを示唆している。

5) まとめ

天文台にある資料室での展示といった非常に限定されたケースではあるが、展示空間が作品制作・展示にどのように意識されるかをみてきた。展示する空間の意味が明示的であればあるほど、作家は空間への影響を勘案し作品、ひいては展示そのものを構成する可能性がある。単純なその場の雰囲気だけでなく、それを構成するより広い意味での環境要素が空間と作品への影響を与えうる。施設活性化の策としてアートイベントを打つことは珍しいことではないが、単純に場所貸し・人寄せの関係だけではない関心は、特により特殊な環境にある施設の利用を考える上で重要になってくるであろう。

謝辞

展示企画は京都大学大学院理学研究科附属天文台、宇宙総合学術研究ユニットの協力を得て行われた。また、学生の参加に関しては京都市立芸術大学のテーマ演習担当者である磯部洋明氏に協力いただいた。

参考文献

- 藤井さゆり, 佐藤慎也. (2009). アートプロジェクトにおける展示空間と作品形態に関する研究. 日本建築学会大会学術講演梗概集.
- 玉澤春史, 樋本隆太, 磯部洋明. (2014). 衛星データ利用芸術作品の製作と天文台への展示: 作家は研究リソースのどこに興味をもったか. 科学技術コミュニケーション, 15, 91-106.
- 富田良雄 (2012) 山本一清先生資料の概要. 第二回天文台アーカイブプロジェクト報告会集録, 1-3
- 上段貴浩, 脇田祥尚. (2010). アートイベントによって顕在化する歴史的市街地の地域資源. 日本建築学会計画系論文集, 75 (658), 2873-2880.